

令和6年度第2回長野市社会福祉審議会児童福祉専門分科会
(長野市版子ども・子育て会議)
会議要旨

- 開催日時 令和6年5月30日(木) 午後1時30分から午後3時30分まで
- 開催場所 長野市役所第二庁舎10階 講堂
- 出席委員 水口委員、茅野委員、渡邊委員、和田委員、塚田委員、石田委員、宮本委員、深澤委員、田中(宗)委員、高橋委員、日台委員、青木委員、田中(亜)委員、中村委員、松田委員
- 欠席委員 塚原委員、宮下委員
- 事務局出席者 島田こども未来部長、丸山こども政策課長、中村子育て家庭福祉課長、宮下保育・幼稚園課長、石坂こども総合支援センター所長ほか
- 傍聴者 2名
- 報道機関 2社

発言者	内容
	1 開会
会長	2 挨拶
事務局	3 議事 (1) 第三期子ども・子育て支援事業計画策定に係るアンケート調査の結果報告 資料1・資料1別紙・資料2に基づき説明 《質疑応答》
委員	資料1の29ページから40ページより、長野市子育てガイドブックの認知度は高く、こども総合支援センター「あのえっと」の認知度が低いように感じた。「あのえっと」の存在をより多くの方に知っていただく必要があるのではないか。
事務局	子育てガイドブックは、子育て全般についての情報が載っており、入手できる機会も多いことが、広く認知されている要因であると考えます。 「あのえっと」については、相談窓口として周知に努めるとともに、計画にどのように反映させていくかを考えていく。
委員	資料1の80ページから83ページによれば、子育てに関する情報の入手先について、インターネット以外の大半の項目が前回から数値が下がっている。 日頃保護者と接していても感じることだが、子どもへの関心が下がっている傾向があるのではないか。対策を行うべき。
事務局	SNS上の情報に頼りがちな社会全体の傾向を踏まえて、今後の施策を考え

発言者	内容
	ていく。
委員	「あのえっと」のはたらきに期待しているが、子ども・子育てに関する民間団体との繋がりが少ないように感じる。もっと意識してほしい。
事務局	民間との連携は、子育て支援ネットワークの構築にとって重要であり、その点を踏まえて計画策定に取り組む。
委員	社会全体で母親の就労状況が変化していることもあると思うが、子育てをするなかで、(以前より) 人と人との繋がりが薄くなったと感じる。 対話や助け合いができるような環境を作してほしい。
事務局	子育て支援ネットワークづくりと同様、人と人との繋がりも重要であり、計画策定のなかで考えていく。
委員	今回の調査に50%の人しか回答していないことを忘れてはいけない。未回答の50%の人がどういう状況に置かれているかという視点を持って、計画策定への検討を行ってほしい。 また、資料2の25・26ページの表中のスコアは何の数値か教えてほしい。
事務局	スコア化という手法を用いており、項目毎に点数付けを行い、平均点を算出する方法である。詳しい話は担当者に説明してもらう。
委託先	25ページ以降では、全15の問を、それぞれに関連する項目(情緒の問題、仲間関係の問題、向社会性について)に割り振っている。 例えば、2、5、8、10、15番は情緒の問題に関連する質問になっている。「あてはまる」が2点、「まああてはまる」が1点、「あてはまらない」が0点と点数をつけて、項目毎の合計点数を回答者数で割った平均点を算出し、授業の理解度とのクロス集計を行ったところ、「授業がわかる」という人のスコアが2.52点、「教科によってわからないものがある」という人のスコアが3.55点、「授業がわからない」という人のスコアが4.79点となっている。 このように点数が高い＝問題性が高いという分析になるので、授業が分からない理解度が低いという子どもほど、点数が高くなっている。
委員	7番の問では、点数が逆転処理されているということによいか。
委託先	お見込みのとおり。7番と14番の2項目に関しては、点数を逆転させた数字が表中に記載されている。
委員	資料1の117ページの「子育てに関して日頃悩んでいること、気にかかること」について、最も高い数値が、子どもの育ちそのものではなく、経済的な部分であることに衝撃をうけた。

発言者	内容
事務局	<p>また、「仕事や自分のことが十分にできない」の数値がアップしている一方で、「子どもを叱りすぎている気がする」の数値は下がっている。こういった変化は現在の保護者と子どもの関わり方を表しているように思う。</p> <p>学校の授業がわからないということが、子どもたちの心身や生活の様々なところに影響を及ぼすということを認識しながら子どもと関わる必要がある。</p> <p>子どもと保護者の関わり方について分析しながら、どのように施策に結びつけていくか検討していく。</p> <p>先の委員の意見に対して、回答数には統計の限界もあるが、回答しづらかった方や様々な事情により回答できない方も多々いらっしゃることは承知している。そういった方々の声もできるだけ酌み取りながら、計画を策定していく。</p>
委員	<p>自由記載の項目が前回の調査にはあったが、今回の調査には無いのか。</p>
事務局	<p>今回も設問を用意したが、現在集計作業中のため今後示していく。</p>
委員	<p>コロナ禍では、子どもの体調が少し悪いだけでも園や学校を休ませなくては いけなかった。「仕事や自分のことが十分にできない」という声について、子どもへの関心低下もあるかもしれないが、どうしても仕事を休まなければならない保護者側の事情もあったと思う。</p> <p>コロナの三年間は、参観日や交流会などのイベントも中止になったため、人と人の関係性が希薄になってしまった。この部分を今後どのようにしていくか、一緒に検討してほしい。</p>
事務局	<p>コロナ禍の子育てについては、「子育ての方法が分からない」「居場所がない」「インターネットを見て子育てする」などの声も耳にする。</p> <p>ようやく通常の生活に戻りつつある中で、保護者の方の様々な思いや意見を計画に反映させていきたい。</p>
委員	<p>「あのえっと」がなかなか認知されていない集計結果があったが、最終的には「あのえっと」が必要ない社会になればよい。</p> <p>困っていることを相談できる人が身近にいる環境、昔のように気軽に声掛けしあえるような社会になれば、相談窓口である「あのえっと」は必要なくなるのではないか。</p> <p>長野市としてどうあるべきか、市民として生活がどうあるべきか、という視点から、「あのえっと」を入口として考えると、計画策定に向けて深い議論ができるのではないか。</p>
事務局	<p>相談の入口である「あのえっと」を、どのように政策の展開に結び付けられるか計画策定の段階で検討する。</p>

発言者	内容
委員	<p>資料2の報告書に、「学校の授業がわからない」という言葉がある。原因として本人の学力的にわからない場合と学校の教え方が悪い場合が考えられる。</p> <p>頭の処理能力には、同時処理と継次処理の2種類があり、どちらが得意かは子どもによって異なる。学校では、どちらかという継次処理の内容を扱うので、同時処理が得意な子は混乱することがある。</p> <p>不登校や学習障害を起こす子には、学習支援の一環として教育センターで同時処理・継次処理のテストを受けてもらうが、実際の支援に結びつかないことが多い。学校の先生もどうやって教えたらよいかわからないのではないかと。</p> <p>また、8ページの「こどもが勉強を教えてもらう人」について、学校の授業がわからない子どもでも、小5・中2では、親や学校の先生に聞いて勉強しようという傾向がみられるが、16～17歳になると、周囲に頼らず、本や教科書・インターネットを使って自分でなんとかしようとする学生が多い。</p> <p>「学校の授業がわからない」にも、様々なタイプがあるということ进行分析しながら、学校教育がそれぞれの子どもの特性にもっと寄り添ったものになればよい。</p>
事務局	<p>学校教育の施策も関わってくるので、計画の体系や政策と結びつくような形で検討していく。</p>
(2) 第三期子ども・子育て支援事業計画の基本的な方向性について	
事務局	<p>資料3～5に基づき説明</p> <p>《質疑応答》</p>
委員	<p>第二期計画では、子どもの貧困についての項目が挙がっているが、計画期間中に子どもの貧困対策計画が策定された。第三期計画では、貧困対策計画はどのような取り扱いになるのか。</p> <p>また、社会全体への子ども・子育て支援を今回の計画に盛り込むとすれば、どういった位置付けになるのか。</p>
事務局	<p>まず第三期計画の位置付けとして、次世代育成支援対策法に定める「行動計画策定指針」を踏まえた計画と子ども子育て支援事業計画を一体的に策定する予定。</p> <p>貧困対策計画については別立てになるので、それぞれの計画が両立しているという認識で差し支えない。</p> <p>社会全体への支援について、アンケート内容等をどういう形で反映していくか、体系に位置付けしていくか、今後議論していく。</p>
事務局	<p>あくまでも情報共有になるが、国は、こども基本法を制定し、こども大綱を示した。その中で、市町村に「市町村子ども計画」を策定することを努力義務として課した。</p>

発言者	内容
委員	<p>この「市町村子ども計画」について、先日の議会での質問に対して「今後、状況を見て、研究検討する」という答弁を行ったが、しかるべきタイミングで考えていく。</p> <p>今後「市町村子ども計画」を策定する際に、第三期計画をどうするかという議論が必要になると思う。</p> <p>第三期計画の策定に向けて、子どもを増やしたい、少子化を防ぎたいという視点は入ってこないのか。</p>
事務局	<p>国の整理では少子化の大綱、子ども若者の大綱、貧困の大綱と分かれている。子どもに関する話として、内容が全く被らないということはないが、少子化について核心にせまる部分まで、今回の計画の中で踏み込めるかどうかは非常に難しいところ。結婚妊娠から児童福祉法の範囲を現在の基本的な考え方としている。</p>
委員	<p>各家庭の経済的負担が高まる中で、子どもができない家庭への医療支援や多子世帯への負担軽減などがあれば、少子化への対策となる可能性もある。</p> <p>国の整理の仕方があるのでやむをえない部分もあると思うが、第三期計画でも少子化対策について触れる部分があってもよいのではないか。</p>
事務局	<p>こども基本法、こども大綱の延長線上にある、こども未来戦略方針は「2030年に少子化を反転させる」という考えのもと成り立っており、少子化についても意識せざるを得ない。どのように切り込んでいくか、今後考えていかなければならない。</p>
4 その他	
(1) 多子世帯等保育料軽減事業の実施について	
事務局	<p>資料6に基づき説明</p> <p>《質疑応答》</p>
委員	<p>保育料基準額表では、市町村民税48,600円以上6万円未満の世帯をD1区分としている。今回の事業では市町村民税57,700円未満の世帯を低所得世帯として区分しているが、D1区分の世帯の中で、取り扱いが分かれるということか。</p>
事務局	<p>お見込みの通り。</p>
委員	<p>子どもの数のカウント方法が変わったのか。</p>
事務局	<p>従来は保育所などの対象施設に在籍している子どもの数のみをカウントしていたが、今回は出生順位を採用している。</p>

発言者	内容
委員	<p>カウント方法は分かりやすくなっていると感じる。</p> <p>一方、家庭保育している方も預けたいという要望が出てくる可能性がある。そうすると保育士の確保が喫緊の課題になる。今年度4月からの遡及適用であるため、各施設は速やかに保育士確保に動かななくてはならない。</p> <p>しかし昨今、保育士はどこも人手不足なので、保育士確保策が併せて検討されなければ、現場としては非常に厳しい。</p>
事務局	<p>委員のおっしゃる通り、現在の状況でも保育士の確保には大変苦慮している。潜在保育士の職場復帰に向けて、研修の実施や現場を見学していただくことなども考えている。</p> <p>また、長野県が保育士確保のための事業を実施しているので、本市としても県と連携しながら保育士確保に努めていきたい。</p>
委員	<p>長野県では保育士の家賃補助制度が導入されていないため、長野市独自で採用できないか検討してほしい。</p> <p>家庭保育で十分成長できている子どもを早期に保育所や幼保連携型認定こども園に誘導するような政策にも見えてしまう。従前の私学助成の幼稚園等においては、ただでさえ少子化で苦しいのに、入園者のさらなる減少にも繋がっていくのではないかと。</p> <p>本来家庭で保育できる方も、パート勤務にでて保育を利用しようというようなことを誘導していく施策にみえる。労働人口確保のためということもあるのかもしれないが、幼児教育保育の政策とどうやって融合させていくのかということが重要。あまり偏らないように、家庭保育への支援も併せて検討してほしい。</p> <p>全国では、保育の無償化を行ったことによって少子化が進んでしまったという事例があれば、公立の0歳保育を停止したが、1世帯当たりの出生率が上がっているという事例もある。</p> <p>少子化対策に繋がる無償化になるように検討を行ってほしい。</p>
事務局	<p>子育てへの不安の声が様々上がっている中で、オール長野県として中核市である本市が全県を引っ張るような形で事業化させていきたい。6月議会で審議されることになるが、ご意見いただいた内容を踏まえて、少子化対策、子育て支援に繋がるように取り組んでいく。</p>
	<p>5 閉会</p>